様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年３月３１日現在

機関番号：３２６５２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５２０２８１
研究課題名（和文）　イギリス・ルネサンス期文化におけるジェンダーと女性の主体構築の表象とその変容
研究課題名（英文）　Representations and Transformations of the Construction of Female Subjectivity and Gender in English Renaissance Culture
研究代表者
楠　明子（KUSUNOKI AKIKO）
東京女子大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：40104591

研究成果の概要（和文）：本研究ではジェイムズ朝（1603 年～1625 年）、特に 1610 年～1625 年の文化を中心に、政治に介入する女性の主体構築の表象とその変容の文化的・歴史的な意味を考察した。当時抬頭してきた Mary Wroth を始めとする女性作家と、シェイクスピアやベン・ジョンソン等の同時代の男性作家の作品を比較することにより、イギリス・ルネサンス期における女性表象の変容とジェンダーの関わりを明らかにすることを試みた。

研究成果の概要（英文）：With special reference to the Jacobean period, in particular in the years from 1610 to 1625, this study explored the cultural and historical significance of representations and transformations of the construction of subjectivity of women who participated in politics. By comparing works by female writers at the time and those by their contemporary male writers, it examined the relationship of the transformations of representations of female subjectivity with the concepts of gender in English Renaissance society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
２０１２年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学
キーワード：イギリス・ルネサンス演劇；女性作家；シェイクスピア；メアリ・ロウス；エリザベス朝；英文学；フェミニズム；シドニー

１．研究開始当初の背景

2009 年度～2012 年度に行った本研究は、過去 4 期にわたる科学研究費補助金（1995 年度～1997 年度；1999 年度～2001 年度；2002 年度～2004 年度；2005 年度～2008 年度）を得て行った研究を基盤としている。イギリス・ルネサンス期の文化における、女性の主体構築の表象とその変容の社会的および歴史的意味を、これまでの研究が主にエリザベス朝（1558 年～1603 年）とジェイムズ朝初期を中心としていたのに対し、今回はジェイムズ朝後期（1610 年～1625 年）に時代を下げ、焦点を演劇に当てて考察した。この分野の研究を国内だけではなく国際的レベルで発展させるという目標が、本研究開始当初の背景にある。

２．研究の目的

本研究の目的は、女性が「自己」を認識し始めたイギリス・ルネサンス期において、いかなる「自己」構築を試み、当時の文化において女性の「自己認識」がいかに表象されているか、そしてそれが時代と共にいかに変化を遂げているかを、ジェイムズ朝中・後期（1610 年～1625 年）の演劇を中心に考察することである。当時抬頭してきた女性作家と、同時代の男性作家の両視点を突き合わせることで、女性が「自己」を表現するために、この時代の文化の中でいかなる「意味」を創り上げようとし、それが時代の推移に伴いいかに変化していったか、かつその文化的意味を探究した。この 4 年間では特に政治や社会変革に関与した女性に焦点を当て、ポストモダン以降の文化批評を用いながら研究を進めた。さらに日本の古代女流作家の作品、および歌舞伎における男性俳優による女性の主体構築の表象や、現代イギリスおよび現代日本における女性の「自己構築」の表象との比較も視野に入れながら、イギリス・ルネサンス期文化の特徴の一つといえる女性の「主体構築」の表象の政治的・社会的・歴史的意味とその変容を明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

上記の目的の研究を遂行するために下記の 4 方法を用いた。

(1) 英語による著書の草稿執筆

すでに Palgrave Macmillan（London）出版社と正式に刊行を契約している単著：*Gender and Representations of the Construction of Female Subjectivity in English Renaissance Literature: Creating Their Own Meanings*（使用言語：英語）の全六章のうち第四章（‘Women and Marriage’）、第五章（‘Women and Elizabeth I’）の草稿を 2012 年度末までに執筆した。

(2) 上記著書執筆のための第一次資料のリサーチおよび現地視察。特に下記の重要な 2 つのリサーチを遂行した。

2009 年～2012 年の 4 年間、毎夏 1 ヶ月間英国に滞在し、大英図書館（The British Library）と貴族の館のアーカイヴ等で第一次資料のリサーチを進めた。特に Sidney 家のアーカイヴに所蔵されている Mary Wroth のロマンス劇 *Love's Victory* の現存する世界で唯一の完全な形の手稿のリサーチをした（現当主の許可はあらかじめ取得した）。また、海外の Mary Wroth 研究の第一人者たちと常に交流を保ち、2009 年 3 月～4 月には彼らと共に The Newberry Library（Chicago）を訪れ、世界で唯一現存する Wroth の手稿、*Urania* Part II のリサーチをした。

(3) 国内・国際学会での口頭発表の発表論文や「講演」の執筆、およびパネルやセミナーの企画・実施

① 2010 年 5 月、第 82 回日本英文学会全国大会（会場：神戸大学）にて招待講演「‘Cabinet’に保存された女性の自己」を行った。

② 2010 年 8 月、第 34 回 The International Shakespeare Conference（於：The Shakespeare Institute, The University of Birmingham, Stratford-upon-Avon, 英国）のセミナーにおいて、論文‘Beyond Historicism’を発表した。

③ 2011 年 7 月、プラハのカレル大学（チェコ）で開催された第 9 回 World Shakespeare Congress において、主催機関である The International Shakespeare Association の執行委員・コングレス委員を務め、5 年に 1 度世界のどこかの都市で開催されるこの大国際学会の運営に関わった。かつパネル‘Women Writers in the English Renaissance’で論文‘*Love’s Victory* as Mary Wroth’s Response to Shakespeare’s Gender Distinctions in *Romeo and Juliet*’を発表した。

④ 2012 年 8 月、第 35 回 The International Shakespeare Conference（於：The Shakespeare Institute, The University of Birmingham, Stratford-upon-Avon, 英国）のセミナーにおいて、論文‘Profession, Expertise, Identity and Shakespeare’を発表した。

⑤ 2013 年 4 月 27 日、日本シェイクスピア協会・日本英文学会共催の「シェイクスピア祭」（会場：学習院大学）における招待講演、「シェイクスピア劇で少年が演じる女の‘ambition’」の準備のためのリサーチおよび講演原稿の執筆をした。

(4) 国際的プロジェクトへの貢献

① Shakespeare 研究の世界で最も権威ある年刊誌 *Shakespeare Survey*（Cambridge UP）の編集委員を日本人で唯一人務めており、世界中から投稿される論文を査読し（主に女性の主体に関わる論文の査読）、かつイギリスにおける編集会議に出席し、本誌の編纂に関わることで、女性の主体構築の表象の研究に世界的視野を導入してきた。本誌は査読が厳しいため、従来日本人研究者の論文が掲載されることはほとんどなかったが、日本シェイクスピア協会会長を務めた経験（2005 年 4 月～2009 年 3 月）を生かし、優秀な日本人研究者に投稿を勧め、日本におけるシェイクスピア研究を世界に発信する役割を果たした。

② 国際シェイクスピア学会（The International Shakespeare Association）の執行委員・大会委員として、2011 年 7 月プ

ラハ（チェコ）で開催された第9回世界シェイクスピア学会大会の企画を進めた。かつ、この世界学会のために、17世紀初期イギリスの女性作家の主体の認識と政治分野への関与を中心とするパネルを企画し、自らも論文を発表した。このパネルは好評で、4人のパネリストのほかに10人ほどの執筆者を加え、共編著 *Mary Wroth and William Shakespeare* を2013年にRoutledge社より刊行する予定。
③ 2008年夏より *The Cambridge World Shakespeare Encyclopedia* の編者（5カ国を代表する6人のシェイクスピア学者の編者から成る）を務めており、イギリス・ルネサンス期の女性作家、女性の主体構築、当時の劇場、ポピュラーカルチャー、ハイカルチャー等の項を担当し、編纂した。また、他の項の執筆者として日本のシェイクスピア学者を推薦する権限をもつので、日本のシェイクスピア研究を世界に披露する貴重な機会を創ることができた。本書はCambridge University Pressより2013年末にHardcover版とOnline版の両方で出版される。

４．研究成果

各年度の研究成果は以下である。

(1) 2009年度

① イギリスのPalgrave Macmillan社とすでに正式の契約を結んでいる著書、*Gender and the Construction of Female Subjectivity in English Renaissance Literature: Creating Their Own Meanings*（LondonとNew Yorkで同時刊行）の草稿の執筆および改訂を進め、平成25年（2013年）末の脱稿を目指して研究を進めた。

本書は初期近代イギリス文化において人々が自己を認識し社会に個人主義が芽生え始めた時期に、女性、男性がそれぞれどのように自己認識を構築し、自己存在の「意味」を確認しようとし、どのような表現でそれを表象しようとしたかを、女性の主体構築を中心に男性の主体構築とも比較しながら、6章立てで論じる。1章：「結婚と女性」、2章：「復讐と女性」、4章：「『ロマンス』と女性」については草稿はすでに大体出来上がっているが、イギリス・ルネサンス期の後半であるジェイムズ朝（1603年～1625年）、特に1610年～1625年の文化に議論の焦点を絞るようにこれらの章の草稿を改訂した。
② 研究代表者は2013年末Cambridge University Pressより2巻本およびOnline版で刊行される予定の *Cambridge World Shakespeare Encyclopedia* の6人の編者（米・英・オランダ・日・ブラジル）の1人として編纂を始めた。執筆中の上記著書のテーマでもあるイギリス・ルネサンス期の女性の主体構築の表象と当時の文化・社会とに関わる「項」を担当する一方で、できるだけ多くの日本のシェイクスピア学者がこの「事典」に寄稿できるように編集作業を進めた。
③ 2011年7月プラハで開催された第9回「シェイクスピア世界学会大会」を主催するISA（国際シェイクスピア学会）の執行委員、および「プラハ学会」大会委員を務め、パネル、セミナー、個人発表の申請の審査など、他国の委員と協力して学会開催の準備を進めた。

同時にこの学会のパネル‘Women Writers in the English Renaissance’において、Mary Wroth作のロマンス劇 *Love's Victory* とShakespeare劇を比較し、かつ1620年頃のボヘミア（プラハ）とイギリスの外交関係についての口頭発表を行うため、他のパネリストと打合せをしながら、そのためのリサーチを進めた。

(2) 2010年度

① 研究代表者は、本年度はジェイムズ朝後期の作品、主にシェイクスピアのロマンス劇と英国史上初の女性作家といわれるLady Mary Wroth（1587?～1651/53）の作品を中心に、女性の自己構築の表象の変容を、主にジェンダーの視点から研究した。同時に同テーマを扱った日本語による著書『メアリ・シドニー・ロウス―シェイクスピアに挑んだ女性』（みすず書房より2011年3月刊行）と、英語の著書 *Gender and Representations of the Female Subjectivity in Early Modern English Literature: Creating Their Own Meanings*（イギリスのPalgrave Macmillan社と正式契約済み）の草稿の執筆を進めた。
② 5月30日、第82回日本英文学会（於：神戸大学）で招待発表「‘Cabinet’に保管された女性のPublic Space―ジェイムズ朝におけるロマンスの変容」を行った。
③ 8月10日、イギリスのStratford-upon-AvonのThe Shakespeare Instituteが開催する第34回The International Shakespeare Conferenceのセミナーにおいて、新しい文学・文化理論であるPresentismを用いて、イギリス・ルネサンス期の女性作家による女性の主体構築の表象を論じる‘Beyond Historicism’を発表した。
④ 2011年3月に『メアリ・シドニー・ロウス―シェイクスピアに挑んだ女性』をみすず書房より上梓。
⑤ 本年度より研究組織に加わった研究分担者は、イギリス・ルネサンス期以降、特に王政復古期の女性作家による主体構築の表象について、Aphra Behn、Eliza Heywood等の作品を中心とする研究を行った。

(3) 2011年度

① 研究代表者は、平成23年度の研究課題の一つであったイギリス・ルネサンス演劇の、

特にシェイクスピア劇の女性登場人物（当時は少年俳優によって演じられた）についてのリサーチを進めた。
② 2011年7月16日から1週間、プラハ（チェコ）で開催された第9回国際シェイクスピア学会大会に出席し、7月21日にイギリス・ルネサンス期の女性劇作家を扱うパネルで、イギリス初の女性作家 Mary Wroth による *Love's Victory* と、シェイクスピア作の悲劇『ロミオとジュリエット』との比較を発表した。このパネルは好評を博し、4名のパネリスト以外の研究者も招き、*Mary Wroth and William Shakespeare* という共著を Routledge 出版社（英）から2013年末に出版することが決定し、現在、編纂中である。
③ プラハ国際シェイクスピア学会大会での発表に備えるために、事前に渡英し大英図書館で発表論文に関わるリサーチをした。また、国際学会大会後はロンドンに戻り、2013年末脱稿予定の研究代表者による英語の著書（Palgrave Macmillan 刊行）執筆のための第一次資料のリサーチを1週間行った。この間、現在、編者の一人として編纂中の *Cambridge World Shakespeare Encyclopedia*（2013年刊行予定）について、他の編者と打合せをした。
④ 10月30日、日本英文学会九州支部第64回大会（会場：大分大学）において、Ophelia、少年俳優、エリザベス朝のポピュラーカルチャーについての「特別講演」（招聘講演）を行った。
⑤ 研究分担者はシェイクスピア劇が女優によって演じられた王政復古期・18世紀のイギリス演劇に焦点を当て、特に社会的状況において女性と似た立場にあった「徒弟」の表象を中心に、小説の抬頭の文脈で研究した。

(4) 2012年度
① 研究代表者は著書、『シェイクスピア劇の〈女〉たち―少年俳優とエリザベス朝のポピュラーカルチャー』を2012年7月にみすず書房より刊行した。
② イギリス・ルネサンス期の女性作家 Mary Wroth と Shakespeare をさまざまな観点から比較する共編著、*Mary Wroth and William Shakespeare*（2013年末、Routledge 刊予定）の編纂を進めた。楠は Mary Wroth の *Love's Victory* と Shakespeare の *Romeo and Juliet* を比較する論文を寄稿した。
③ *Sidney Journal* 31（2013）の「Mary Wroth 特集」に Mary Wroth による女性の「書く」行為の表象についての論文を寄稿し（査読付き）、2013年4月に刊行された。
④ 5カ国を代表する6人のシェイクスピア学者で編纂中の *Cambridge World Shakespeare Encyclopedia* は、編纂作業のすべてを終え、原稿を2013年3月末に Cambridge University Press に提出した。2013年末頃に刊行の予定。研究代表者は科研費研究テーマに関わる分野を担当し、さらに広い視野からイギリス・ルネサンス期の女性表象を研究する機会を得た。
⑤ 2016年7月～8月に Stratford／London（King's College）で開催されるシェイクスピア没後400年記念の第10回 World Shakespeare Congress の執行委員・大会委員に指名され、すでに London 側の責任者と共にシェイクスピア時代の女性に関わる企画を進めている。
⑥ 研究分担者は、ルネサンス期の庶民層の表象を小説の誕生と関わらせた『〈徒弟〉たちのイギリス文学―小説はいかに誕生したか』（岩波書店）を上梓し、また王政復古期の男性・女性作家による女性表象を比較研究した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① Akiko Kusunoki、"Sorrow I'le Wed": Resolutions of Women's Sadness in Mary Wroth's *Urania* and Shakespeare's *Twelfth Night*、*Sidney Journal*、査読有、Vol.31 No.1、2013、117-130
② 原英一、18・19世紀小説とジェイムズ朝市民劇―イギリス近代文学における「徒弟」の系譜―、シルヴァン、査読有、第43・44号、2012、1―23
③ 原英一、徒弟制度とジョージ・リロの『ロンドン商人』、日本ジョンソン協会年報、査読無、No.35、2011、24―28

〔学会発表〕（計６件）
① 楠明子、シェイクスピア劇で少年が演じる女の'ambition'（招待講演）、シェイクスピア祭（日本シェイクスピア協会・日本英文学会共催）、2013年4月27日、学習院大学
② Akiko Kusunoki、Professions, Expertise, Identity and Shakespeare、第35回 International Shakespeare Conference、2012年8月8日、The Shakespeare Institute（University of Birmingham, Stratford-upon-Avon, 英国）
③ 楠明子、少年が演じるオフィーリアの表象とエリザベス朝のポピュラーカルチャー（招待講演）、日本英文学会九州支部第64回大会、2011年10月30日、大分大学
④ Akiko Kusunoki、*Love's Victory* as Mary Wroth's Response to Shakespeare's Gender Distinctions in *Romeo and Juliet*、第9回 World Shakespeare Congress、2011年7月21日、カレル大学（プラハ、チェコ）
⑤ Akiko Kusunoki、Beyond Historicism、

第 34 回 International Shakespeare Conference、2010 年 8 月 10 日、The Shakespeare Institute（University of Birmingham, Stratford-upon-Avon, 英国）
⑥ 楠明子、‘Cabinet’に保管された女性の Public Space―ジェイムズ朝文化におけるロマンスの変容（招待発表）、第 82 回日本英文学会、2010 年 5 月 30 日、神戸大学

〔図書〕（計３件）
① 原英一、岩波書店、〈徒弟〉たちのイギリス文学―小説はいかに誕生したか、2012、282
② 楠明子、みすず書房、シェイクスピア劇の〈女〉たち―少年俳優とエリザベス朝の大衆文化、2012、217
③ 楠明子、みすず書房、メアリ・シドニー・ロウス　シェイクスピアに挑んだ女性、2011、199

６．研究組織
(1)研究代表者
楠　明子（KUSUNOKI AKIKO）
東京女子大学・人間科学研究科・教授
研究者番号：40104591

(2)研究分担者
原　英一（HARA EIICHI）
東京女子大学・現代教養学部・教授
研究者番号：40106745